

報告 Report

ものづくり大学同窓会 平成 23 年度 地域貢献活動報告

原稿受付 2012 年 3 月 28 日

ものづくり大学紀要 第 3 号 (2012) 119~122

加藤大樹^{*1}, 上原苑子^{*2}, 大塚秀三^{*3}, 宮本伸子^{*4}^{*1}ものづくり大学同窓会 理事(学務部 総務課 施設係)^{*2}ものづくり大学同窓会 会長(学務部 教務・情報課 教務係)^{*3}ものづくり大学同窓会 監査(技能工芸学部 建設学科)^{*4}ものづくり大学 学務部 学生課 課長 (現 教務・情報課長)

1. はじめに

昨年 3 月 11 日に発生した東日本大震災を受け、ものづくり大学同窓会(会長:上原苑子・建設 2 期)では有志を募り、災害ボランティア活動(以下、「ボランティア活動」とする)を行った。また、近隣の幼児・児童を主対象にもものづくりの楽しさを啓発することを目的とし、既に社会で活躍している本学の卒業生の有する技能・技術を活かした地域貢献活動として、体験型ものづくり教室(以下、「ものづくり体験教室」とする)を、昨年度に引き続き実施した。

ここでは、2011 年度にもものづくり大学同窓会が実施した「ボランティア活動」ならびに「ものづくり体験教室」について報告する。

2. 活動概要

「ボランティア活動」は、年間を通して 6 回(2011 年 12 月末日現在)行い、活動場所は岩手県陸前高田市とした。

「ものづくり体験教室」の開催は、行田市よりものづくり大学が依頼を受けて実施している「おもしろものづくり教室」、行田市商工会議所の主催する「商工祭・時代祭り」など、大学周辺において年間を通じて複数回実施した。メニューは、毎年好評を博している道具箱型筆箱およびガラスプラストである。使用する材料の一部については、建設学科のご好意により実習の廃材をご提供頂いている。

講師は、昨年度同様ものづくり大学同窓会役員ならびに卒業生有志を主としており、ボランティアによるものである。今後、同教室を更に活性化するため、Teaching Staff として卒業生を広く募っているところである。

3. 活動内容

3.1 陸前高田市災害ボランティア活動

3.1.1 概要

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災を受け、岩手県陸前高田市での復興支援活動

を行った。

この活動は、地震発生の日より計画していたが、震災直後はまだボランティアの受け入れを行っていなかったため、受け入れが始まるまでは情報収集と卒業生の有志を募る準備期間とした。

活動場所を岩手県陸前高田市とした理由として、建設学科元非常勤講師村上村上幸一先生の故郷であることがあげられる。村上先生は、開学当初から 2010 年度までものづくり大学建設学科の非常勤講師として、多くの学生に指導を行っていた。そのため、多くの卒業生と交流があり、震災直後は安否を心配する声が多く聞かれた。ものづくり大学同窓会では、村上先生に対する卒業生の想いを伝え、村上先生の協力のもと故郷の復興支援を進めることとした。

3.1.2 実施報告

ボランティア活動は、4月・5月・8月・9月・10月・11月・12月にて行い、31日間で延べ 219 名での活動を行った。（写真 1）

第 1 回目の活動は、事前に現地連絡し状況確認を実施したが、すべてが手探り状態の中、準備が進められた。宿や食料、水に至るまですべて自己完結でき、現地での調達が不要であることを念頭に置いて準備が進められた。また、有志を募り可能な限りの物資も用意し、現地へ向かった。

初めて見る被災地の印象は、言葉に出来ない。被災地より内陸に位置するボランティアセンターを出発し、活動現場へ向かう道中は、平穏な町並みが並び、多少の会話があった。しかし、津波の被害を受けた地域が見えた瞬間全ての会話は止み、数秒の間誰も口を利けなかった。それほどまでに衝撃的な光景であった。

しかし、第 2 回目以降の活動では若干復興も進み、ボランティアの受け入れ態勢の整備や我々の情報の蓄積も進んだため、効率的に活動できるようになった。第 2 回目の活動では、ものづくり大学大塚研究室・日本大学中田研究室合同チームが参加し、専門的意見を活用した効率的作業の実施や大人数による瓦礫や汚泥の撤去活動を実施することができた。

大きな懸案事項の一つであった金銭面の問題についても、赤い羽根共同募金からの支援（「ボランティア・NPO 活動サポート募金（ボラサポ）」）を受けることができたため、かなり軽減された。その他、我々はものづくり大学の卒業生、またはものづくり大学生であるため、次第に一般のボランティアには依頼できない危険を伴う作業や、相応の知識や技術が必要な作業を任されることが多くなった。

ボランティア活動の主な内容は、下記の通りである。（表 1）

また、参加者が社会人であることから、現地での活動日数が限られてしまうため、関東からの長期的支援方法を検討した結果、オリジナルグッズを制作することとなった。グッズは、ボランティアセンターを運営している陸前高田市社会福祉協議会賛同の元、同センターで販売されており、その収益を仮設住宅等へのボランティア活動の費用として充てることとしている。

なお、本活動については 2012 年 1 月 1 日付の埼玉新聞（写真 2）及び 2 月 16 日付の読売新聞（写真 3）にて紹介されている。

表1 平成23年度ボランティア活動一覧

No.	活動期間	参加延べ人数	活動内容
1	4月30日(土)～5月8日(日)	81名	瓦礫撤去, 汚泥掻き出し, 物置移設, 納屋解体, 救援物資配布
2	8月10日(水)～17日(水)	89名	汚泥掻き出し, 側溝泥出し, 仮設住宅への掲示板作製・設置
3	9月17日(土)～20日(火)	15名	草刈り, 瓦礫撤去
4	10月8日(土)～10日(月)	4名	案内板設置のための現地調査
5	11月3日(木)～6日(日)	12名	仮設住宅の入口への案内板の作成・設置
6	12月23日(金)～24日(土)	18名	ボランティアセンターへ仮設風除室設置, 引越し手伝い, 看板用の板の加工, 竹の切出し・加工



写真1 活動状況



写真2 埼玉新聞 (2012/1/1)



写真3 読売新聞 (2012/2/16)

3.2 小学生対象体験教室

3.2.1 道具箱型筆箱

(1) 概要

ここで言う道具箱とは、日本の職人（大工等）が、道具を収納する為に使用していた木製の箱のことを言う。日本文化の一つである職人の道具箱の原理を現代の子供たちに伝えるため、本来の縮尺を変更し、筆箱として使用できるようにした。

作り方については、昨年度と同様である。¹⁾

(2) 実施報告

7月に、昨年と同様に、ものづくり大学が行田市からの依頼で開催している「おもしろものづくり教室」にて、「道具箱型筆箱をつくろう」を開催し、定員の30組を超える応募があった。

3.2.2 グラスブラスト

(1) 概要

ブラストは、建築・製造の両分野において使用されている技術であるが、加工現場を目にする機会の少ない技術である。そういった技術に触れることで、地域の子どもに対し、昨年と異なる角度からものづくりへの好奇心にアプローチできるのではという思いからこの体験教室を開催した。

(2) 実施報告

7月に、3.2.1 (2) と同様の依頼により、「グラスブラストでコップに絵を描こう」を開催し、定員30組に対し、定員を超える数の応募があった。

4. まとめ

本年度は、災害ボランティア活動を精力的に行い、微力ながら被災地の復興に貢献できたように思う。しかし、完全な復興はまだまだ先にあり、ボランティアもまだまだ必要である。現地では、震災から1年が経過し人々の関心が薄れているのでは、との危惧もある。我々はものづくり大学の卒業生として、今後も被災地の復興に尽力していく所存である。

また、体験教室についても、継続的に開催していく予定である。(表2)

表2 参加者一覧

体験教室項目	参加者数	実施時期
道具箱型筆箱	30組	7月(おもしろ)
	20組	11月(中央小)
	43組	11月(時代祭り)
グラスブラスト	30組	7月(おもしろ)

謝辞

ものづくり大学同窓会の活動に際し、学校法人ものづくり大学ならびに学生課をはじめ、実習用機器および実習の廃材提供では製造学科・建設学科より多大なるご支援を頂いています。また、ボランティア活動の一部は、赤い羽根共同募金からの助成を受けたものです。本活動には同窓会役員をはじめ、多くの卒業生・在校生有志のご助力を得ています。ここに、紙面を借りて関係各位に深謝いたします。

文献

- 1) 加藤大樹・上原苑子・大塚秀三・倉川尚志・宮本伸子：ものづくり大学同窓会 平成 22 年度 地域貢献活動報告, ものづくり大学紀要, 1, 2 (2011) 104.